

## 企画展「弥生人といきもの2024 鳥に願いを」主な展示品

 <p>写真提供：大阪府立弥生文化博物館</p>	<p><b>1 鳥形木製品【大阪府指定文化財】</b>  <small>とりがたもくせいひん</small>  <small>いけがみ</small>        池上曾根遺跡（大阪府和泉市・泉大津市）        弥生時代中期 大阪府立弥生文化博物館蔵</p> <p>立体的に形作られた鳥形木製品。弥生時代には鳥に対し、稲に実りをもたらしたり、死者の魂を運ぶ存在、境界を見張る存在、などとみなす様々な信仰があったと考えられており、この木製品も祭祀に関わる道具と考えられる。現在は水鳥の姿に似た胴体部分だけが残っているが、本来は切込み部分に別材で作った翼が組み合わされていた。胴体の底部には2つの穴があり、竿などの先端に挿して掲げるようにして使用していたと考えられる。</p>
 <p>写真提供：西尾市教育委員会</p>	<p><b>2 鳥形木製品</b>  <small>とりがたもくせいひん</small>  <small>すみぎき</small>        住崎遺跡（愛知県西尾市）        弥生時代終末期～古墳時代前期 西尾市教育委員会蔵</p> <p>2枚の板を組合わせて鳥の姿を表した鳥形木製品。東海地方で出土している鳥形木製品は、近畿地方のものよりも時代が下り、このように平板な姿をしたものが多い。ただし、胴体と翼の両方に孔が開いていることから、竿などで高所に掲げるといった使用法は変化していないと考えられる。鳥形木製品はそのほとんどが胴体部しかみつかっておらず、翼も含めた全体像が分かる資料は貴重なものである。</p>
 <p>写真提供：橿原市</p>	<p><b>3 絵画土器（翼を持つ人）【橿原市指定文化財】</b>  <small>つばい</small>        坪井遺跡（奈良県橿原市）        弥生時代中期 橿原市蔵</p> <p>特異な姿の人物が描かれた壺の胴部の破片。この人物の左肩から頭部にかけては、羽根のような放射線状の線刻が描かれている。このような姿の人物を描いた絵画土器は、他の弥生時代遺跡からも出土しており、鳥装（鳥を真似た姿）をした人物と考えられている。おそらくはシャーマン（神や精霊などと交信する人）の姿を描いたものであり、弥生時代の鳥の霊性への信仰を表す資料である。</p>
 <p>写真提供：北海道大学総合博物館</p>	<p><b>4 幼鳥の骨（ニワトリ）</b>  <small>からこ</small> <small>かぎ</small>        唐古・鍵遺跡（奈良県磯城郡田原本町）        弥生時代中期 田原本町教育委員会蔵</p> <p>2023年に北海道大学総合博物館の江田真毅教授らの研究グループによって初めて、紀元前3～4世紀のニワトリのヒナのものであると判明した骨。朝日遺跡を始め弥生時代の遺跡から出土したニワトリの骨はほとんどがオスであるため、ニワトリをつがいで飼育・繁殖までしていたかは不明だったが、この発見により日本での養鶏の開始が弥生時代に遡ることが示唆された。</p>
 <p>写真提供：小牧市教育委員会</p>	<p><b>5 海部養鶏場百分之一図</b>  <small>かいふようけいじょうひやくぶんのいちず</small>        里樵 筆 紙本著色 縦60cm×横95cm        明治時代 小牧市教育委員会蔵</p> <p>名古屋コーチンを生み出した、元・尾張藩藩士の海部壮平・正秀兄弟が経営する養鶏場の最盛期の全景を大画面に描く。明治23年(1890)、海部壮平は東京・上野で開催された第三回内国勸業博覧会に自身の養鶏法について著した『養鶏方案』を出品し、三等有功章を受賞した。本図は、それに付随する絵図面として制作・出品された原本と考えられるもの。鶏舎を『養鶏方案』の記述通り正確に描くだけでなく、働く人々や訪問客、鶏の動きまで生き生きと捉えており、当時の様子を今に伝える貴重な資料である。</p>